The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	複合動詞overeat とその代替表現eat too much に生じる目的語の性質と生起率に関する一考察
Author(s)	岩宮, 努
Citation	Osaka Literary Review. 2020, 58, p. 1-19
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76021
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

複合動詞 *overeat* とその代替表現 *eat too much* に生じる目的語の性質と生起率に関する一考察

岩宮　　努

目次

1. はじめに
2. 先行研究
2. 1. *eat* の目的語生起に関する Fillmore（1986）の分析
2. 2. *overeat* の目的語生起に関する Lieber（2004）の分析
3. 研究の方法
4. 調査結果
4. 1. *eat* の目的語とその生起率
4. 2.「超過」を意味する付加部 *too much* を伴う際の *eat* の目的語とその生起率
4. 3. *overeat* の目的語とその生起率
4. 4. *eat too much* と *overeat* の 2 つの表現形式の生起文脈の違い
5. まとめ

1. はじめに

動詞の意味から容易に予測できる目的語が省略される動詞は、疑似自動詞（安藤 2005: 798）とも呼ばれ、これまで数多くの先行研究によって論じられてきた（Quirk et al. 1985, Biber et al. 1999, 安藤 2005）。中でも、摂食動詞 *eat* は、比較的容易にその目的語 *food* が背景化し、疑似自動詞の典型として議論されることが多い（Levin 1993, Taylor 2015）。

しかし、この動詞の自動詞用法では何らかの *food*（以後、不定の *food*

と記す）が省略されているという見解が今日の英語学において広くみとめられる一方で、どのような文脈でその目的語が背景化するのか、具体的な言語的証拠を示す研究は少ない。また、より大きな視点でこの *eat* の自動詞化を捉えると、この動詞に「超過」の意味をもつ接辞 *over-*が付加され派生した *overeat* にほとんど目的語がとらない（Lieber 2004）、という別の疑問点も存在する。

そこで本稿は、*overeat* と、その基体動詞に「超過」を意味する付加部を伴う *eat too much* という代替表現が、いずれも通常の *eat* よりも目的語の背景化が生じやすくなるという言語的事実に着目し、これら 2 つの表現形式で、いかなる目的語がどれだけの頻度で、またどのような文脈で生起するかをコーパス上のデータをもとに比較・分析する。

2. 先行研究と問題点

本節では、まず Fillmore（1986）の分析を中心に、生起文脈に関わりなく、自動詞用法の *eat* で省略されている目的語は不定の *food* である、という先行研究の見方を概観する。

その上で、*eat* がその複合動詞 *overeat* に派生すると目的語がほとんど生じなくなるのは何故か、という疑問に対して Lieber（2004）が行った分析は不十分なものであることを、コーパス上のデータから裏付けるものとする。

2. 1. *eat* の目的語背景化に関する Fillmore（1986）の分析

Fillmore（1986）は背景化される *eat* の目的語は、文脈にかかわりなく不定の *food* に限られるという一般化を示した。この一般化は、西脇（2011）などによって、レシピの文面やラベル表示といったきわめて特定の生起文脈では、*melon* など特定の *food* が目的語として生じることもあるという若干の反例が示されているものの[1]、基本的には妥当な事実観察であり、

支持できるものである。

eat という動詞が自動詞で用いられている場合、その動詞の意味性質から、何らかの *food* が省略されていることが容易に推測されるため、目的語がなくともコミュニケーション上の問題は生じない。

（1）a. Let's go out to **eat**. (Cobuild)
　　b. Felix chatted cheerfully as he **ate**. (LDOCE)

上記は辞書から引用された用例であるが、ここで暗黙のうちに理解される目的語は、飲食物を表す総称的な事物、つまり修飾語句や定冠詞を伴わない *food* にあたる。たとえば上記（1a）のように、レストランなどで外食する文脈では、食事場所につく前に注文して食べるメニューを特定しておく必要はないし、また（1b）のように話の焦点が動作主の食事にないのであれば、文中に *eat* の動作対象である目的語をあえて明示させる必然性もない。

また、*eat* の目的語として省略されうるのは、不定の *food* に限られるため、以下（2A）の問いに対する（2B）のような返答は容認されない。なぜならBが *Fido ate* と発話する場合は、*ate* に続く省略された目的語には不定の *food* が想定されるため、「サンドイッチ」という特定の食べ物を誰が食べたかという問いの答えにはならないからである。

（2）A: What happened to **my sandwich**?
　　B: * Fido **ate**.
　　(Fillmore 1986: 97)

また、下記（3）のように、話し手が *he* の実際に食べていたものを知らない場合でも、目的語が特定されない自動詞用例が生じる。

（3）He was **eating**: I wonder what he was eating.
(Fillmore 1986: 96)

2. 2. Lieber（2004）の分析

本節では、*eat* の目的語として省略されるのは不定の *food* であるという前提のもと、その複合動詞 *overeat* ではほとんど目的語が生じなくなるのは何故かという問題を、Lieber（2004）の一般化をもとに論じる。

overeat という動詞は、OED や一般辞書ではたいてい自動詞として扱われており[2]、実際にほとんどの用例が（4a, b）のような自動詞用例である。しかし、Lieber の指摘するように、下記（4c）のような他動詞用法もみられる（なお Lieber は具体的な *overeat* の他動詞用例を示していないので、ここで引用される例文は本研究がコーパス上から独自に抽出したものである）。

（4）a. A woman who **overeats** during pregnancy can cause health problems for her child. (LDOCE)
b. You **overeat**, smoke, drink, bite your nails etc. You don't give your best. You become tense, short-tempered and irritable with other people. (GB/ BNC)
c. Everybody loves **chocolate**. And maybe they **overeat chocolate**. (CA 2018/Now Corpus)

この *overeat* という動詞は、特定の時や場所というよりも動作主が慣習的に行っている動作を示すことが多く、特にニュースや新聞などのフォーマルな英語では、目的語をとることはほとんどない[3]。

この *overeat* の自動詞化は、「過剰」という含意が動詞に付加されることによって、行為そのものが動作の対象よりも際立つようになるため、目

的語が背景化し生じる。

たとえば、(4a) において、妊娠中の女性が食べ過ぎて良いものなどなく、食べ過ぎるという行為そのものが、胎児の健康状態の悪化を導くのであるし、また (4b) のストレスによる「食べ過ぎ」も喫煙や飲酒と同様、行為そのものが体調不良をもたらす。いずれの文脈も特定の飲食物を目的語として明示させる必然性は乏しい。

ただし「過剰」の意味の作用域が特定の指示物にかかっている場合、つまり特定の飲食物のみを食べ過ぎることをその文が意味している場合は、文脈上背景化できない目的語が表出する (Lieber 2004: 132)。

上記 (4c) の例で説明するなら、文脈によって特定された *chocolate* という食物は、聞き手が予期することができる前提情報として捉えられないため、目的語としてあらわれるということになる。

また Iwata (2008) によると、この *overeat* の目的語として表出する特定の *food* に、*sweets* や *fatty food* など、食べ過ぎることで、さらに健康状態に害を及ぼすという特性があるとされる。上記の *chocolate* 以外には、*junk food* や *fast food* などの目的語が生起する例 (Now Corpus) がみられ、コーパス上のデータは、この指摘も事実観察としておおよそ妥当であることを示している。

要するに、*overeat* という動詞は、通常自動詞として機能するものの、文脈によって特定され、かつ *overeat* によってもたらされる結果状態をさらに悪化させる飲食物はあえて、その目的語に生じる、ということになる。

先行研究の一般化はおおよそ支持できるものだが、どのような目的語が、またどの程度の頻度で生じるか、といった具体的な事例が乏しく (Iwata が示した事例も Google から抽出したもので、言語的証拠として提示されるデータの信頼性が十分ではない)、また接辞 *over-* が同等の意味を持つ付加部 *too much* とどのように異なるか、という疑問に対しても十分な分析がなされているとはいえない。

「過剰」の含意が前面にあらわれることで、動作の対象である目的語より動作そのものが認知的に際立ち、目的語が背景化する、という論理が妥当であるとするならば、*eat too much* という、その代替表現といかなる違いが存在するか明らかにしなくてはならないだろう。

本稿はこの問題点をふまえ、以下、コーパスを使い実証的に収集されたデータをもとに、*overeat* と *eat too much* という 2 つの表現形式において生じる目的語の性質・生起頻度にはいかなる違いがあるかを考察していく。

3. 研究の方法

本稿は、国ごとに言語データの分別が行える大規模コーパス Corpus of Global Web-Based English（GloWbe）をメイン・コーパスとして使用し、イギリス、アメリカ、オーストラリア、カナダの 4 カ国から *eat too much* 及び *overeat* が生起する言語データを抽出した[4]。

また、きわめて高頻度で使われ、また汎用性も高い *eat* 単体としてのデータはメイン・コーパスと register を同じくする Core Corpus/ Information Description（GloWbE と同じ Web 上の情報サイトからの言語データを基盤とする）を使用し、抽出した。

なお、本稿で使われる *overeat* の用例は 2019 年 7 月 10 日、*eat too much* の用例は 2019 年 8 月 16 日に、GloWbe を使って、それぞれ抽出された。これらの用例は、原形、過去、過去分詞、3 人称単数、進行形の全ての時制を対象に抽出されているが、動名詞、分詞、および不定詞として時や場所など目的語ではない事物を修飾している場合の用例（*tendency to overeat, desire to eat too much* など）は、カウントしないものとする[5]。

4. 調査結果

4. 1. *eat* の目的語とその生起率

まず *eat* という動詞はどのような文脈でどのような目的語を表出させるか、Corpus/ Information Description から抽出したデータを示す。

この動詞 *eat* の通常の目的語の生起率は、上記コーパスによると 60%（147/244 例）である。*eat* は目的語の省略がきわめて生じやすい典型的な疑似自動詞として知られ、この数値は若干高いように感じられるかもしれない。しかし下記、関係代名詞節の先行詞(5a)や不定詞の目的語(5b)、そして受身文の主語（5c）といった様々な表現形式が全て他動詞用例にカウントされることを考慮すると、別段驚くべき値ではない。

（5）a. The truth is that I eat meat and **all of those animal** that **I eat** everyday are no different from the ones I raise. To me, I am far kinder to the ones I kill than to the ones I buy. (US/ Core Corpus)

b. **His favourite thing** to **eat** is Mac and Cheese. (US/ Core Corpus)

c. The only allergy reaction to **acorns** that I am aware of occurs in areas of the world where **they are eaten**, and occurs to the ingestion of the acorn. (CA/ Core Corpus)

eat は汎用性が高く、固形の食物であればどんなものでも目的語にとることができるため（Taylor 2015: 64)、特に他の食物と比べて特定の食べ物が高頻度で生じるということはない。あえてコーパス上に目的語としてあらわれる上位の概念を挙げるならば、*food, meat, lunch* といった総称的な事物である。

4. 2.「超過」を意味する付加部 *too much* を伴う際の *eat* の目的語とその生起率

eat too much という表現では、目的語の生起率は 37%（230/615 例）となり、「超過」を意味する付加部を伴うことによって、目的語が背景化し、自動詞として生じやすくなる。

また目的語の生起が制限される一方で、*eat* 単体ではあまり生じない特有の目的語があらわれるようになる。特に顕著な目的語は糖分や脂分の多い食べ物で、*sugar* や *fat* といったそれらの食品成分が目的語として表出することも多い（ちなみに *eat* の通常の用例において *sugar* および *fat* が生じる確率があわせて 0.5% であるのに対し、*eat too much* の目的語として *sugar* と *fat* があらわれる確率はあわせて 4.2% に及ぶ）。

先行研究の節で、Iwata（2008）が、*overeat* の目的語として生じる目的語は、「食べ過ぎ」行為をさらに悪化させる飲食物であることを指摘していることにふれたが、このように「超過」の意味が伴って生起する目的語に変化が生じる現象はその代替表現である *eat too much* にもみられることが判明した。では、こういった特殊な目的語がいかなる生起文脈で生じるのか、実際の用例を観察する。

（6）a. I took Rachel to **a birthday party** last week. Everything was going great; I was able to crawl around after her on my hands and knees, and the Ruckerson boy **ate too much cake** and threw up on Bill, ... (US/ GloWbe)

b. “if you **eat too much chocolate**, you will get fat”, because we all know that! (AU/ GloWbe)

（6a）において、*cake* という語そのものが先行文脈にはあらわれてはいないが、*a birthday party* という特定の時・場所を示す語が存在し、そこ

で飲食される特定の *food* が目的語として表出している。これは *a birthday party* などの場で、*cake* だけを食べ過ぎるという特定の生起文脈が存在するのであれば、*too much* の有無にかかわらず目的語の項の削除はできないことを意味する。

では次に(6b)の文を参照されたい。こちらの用例の先行文脈には *chocolate* という語もあらわれなければ、*chocolate* を食べることが予期される時や場所も示されていない。ただ、この用例のように肥満のもたらす様々な健康被害を論じるような文脈で生じている場合は、肥満を悪化させる要因になる特定の目的語は省略できない。

つまり食べ過ぎると何を食べても太る要因になるのだから、*"if you eat too much, you will get fat"* というように、*chocolate* という目的語を省いてしまっても差支えがないようにみえるのだけれども、*chocolate* という特定の食べ物が余計に肥満を助長するのであれば、それは文中に明示すべき重要な情報であって、背景化するわけにはいかないのである。

sugar や *fat* といった食品の成分が *too much* を伴って、目的語として生じやすくなるのも同様の理由による。すなわち、*sugar* も *chocolate* も食べ過ぎることによって余計に健康状態を悪化させる要因となるからである。

(7) a. All in all, the boys spent at least six hours in the van, if you count the trip there and the trip back, plus they didn't sleep well. They **ate too much sugar** while we travelled ...
(CA/ GloWbe)

b. They **eat too much fat and high processed food**, run around all day and at night, it's no wonder that they are completely exhausted.
(US/ GloWbe)

ただ *sugar* や *fat* が目的語にあらわれることは、その「食べ過ぎ」の行為が一過性的なものではなく、ある程度の期間にわたって連続的に行われた行為であることを同時に示唆するものではないかと思う。なぜなら、*chocolate* や *cake, steak* などの特定の食品に対して、*sugar* や *fat* といった食品成分は、(7a) の「旅行中」などの一定期間や、(7b) のような習慣的な行為など、ある程度の期間にわたって繰り返しなされた行為の結果として表出することが多いからである。

いうなれば、*sugar* や *fat* が目的語として生じることは、「食べ過ぎ」行為を悪化させる要因が一つの食品に特定されているのではなく、ある程度の期間で蓄積される糖分や脂質が事態の悪化を招くことを意味しているのである。

本節では *eat too much* という表現形式では、「超過」の含意によって焦点が当てられた行為そのものが動作対象より際立ち、その目的語が背景化されやすくなる傾向がみられるものの、「食べ過ぎ」がもたらす望まざる結果状態（健康状態）をさらに悪化させかねない飲食物は、逆に目的語としてあらわれやすくなる、という言語的事実を確認した。

4. 3. *overeat* の目的語とその生起率

では *overeat* の目的語にはどのような飲食物が、どの程度の頻度で生じるか、コーパス上のデータを提示する。*overeat* の目的語の生起率は *eat too much* での生起率 37% よりも、さらに大幅に低い 7% であった。

この 7% という他動詞率は OED を含める辞書類で自動詞とされる語にしては思いのほか高い数値である。ちなみに、本研究は以前 Cobuild のもととなったコーパス、Wordbanks（1 億語）を使い、*overeat* の自他性を分析したことがあったが、その際は 27/27 例全てが自動詞用例で、動名詞（52 例）や意味上の主語が先行詞となっている不定詞用法（*temptation to overeat* など）でも目的語が生起する事例はなかった。この目的語の生起

率は、インフォーマルな register では *overeat* の他動詞用法はそれほどまれなものではないということを示唆するものである。では、以下、その実際の用例を確認する。

（8）a. They also eat **meat** when they can catch it - baboons are quite the specialized ape. I will allow that we probably **do overeat the meat** - our canine size can attest to that, ... (GB/ GloWbe)

b. "I think **the Paleo Diet** is but one option of many diets choices for lifestyle adherence. I don't think it should keep making claims of curing genetic disorders. It's hard to **overeat meat and veggies**, and allows for a lot of nutrients. (US/ GloWbe)

上記は *overeat* の動作対象が、不定の *food* ではないために、目的語として生じていることを示す事例となる。（8a）は人類が肉を多く食べることによって犬歯を発達させたことを述べる文であり、一方で（8b）は野草と野生動物を中心とした、原始人のような食生活をすることで肥満を解消しようという、パレオ・ダイエットと呼ばれるダイエット法を説明する文である。いずれも目的語が特定の *food*、つまり *meat* でなければ意味をなさないが、こういった用例はきわめて生じにくいとされる *overeat* の目的語でも、不定の *food* ではない事物は背景化できないことを示している。

また前節では、*eat too much* の目的語として食品の成分が生じる事例に触れたが、下記（9a）の脂肪、（9b）の炭水化物の例にみられるように、これらの食品成分も「食べ過ぎ」行為を悪化させる要因として、*overeat* の目的語としても表出していることがわかる。

（9）a. I suspect it's because it is very hard to **overeat fat** except in the presence of carbs. (CA/ GloWbe)

b. When **overeating carbs**, and depending on the person, you get a myriad of different bodily reactions ... (AU/ GloWbe)

ここまで *overeat* の目的語として生じやすい事物を概観したが、文脈で特定されている（8a, b）の *meat* にせよ、（9a, b）の食品成分にせよ、*eat too much* という代替表現でもあらわれる特殊な目的語とほとんど違いがない。

では２つの代替表現において、目的語が生起する確率がここまで異なるのは何故か、という問題を次節にて論じるものとする。

4. 4.　*eat too much* と *overeat* の２つの表現形式の生起文脈の違い

overeat の目的語の生起がより制限される要因の一つとして考えられるのは、まずその生起文脈である。*eat too much* という表現が、一過性の食べ過ぎと習慣的な食べ過ぎ、いずれの動作主の過食行為を示すのによく使われるのに対して、*overeat* によって表される「食べ過ぎ」は基本的には習慣的な行為であり、特定の時間枠ではほとんど生じていない[6]。

Taylor（2003: 232）は、特定の時間を示す副詞句と共起することができるのは、他動詞の属性の一つである瞬時性を持ちうるかどうかに依存すると指摘している。たとえば *John saw Mary at 10 o'clock*（: 235）といった文において、*at 10 o'clock* という副詞句が共起できるのは *Mary* を *see* するという行為が瞬時的なものであるからであり、*obey* といった瞬時性の低い動詞とこの *see* を置き換えても、文自体が不自然なものになってしまう。

これをふまえ *eat too much* が一過性の行為を示す表現としても使用できることを、コーパス上の用例で確認する。

（10）a. Remember that night you **ate too much Chinese takeaway**?

(GB/ GloWbe)

b. I took Rachel to a birthday party **last week**. Everything was going great; I was able to crawl around after her on my hands and knees, and the Ruckerson boy **ate too much cake** and threw up on Bill, ... (US/ GloWbe) (6a 再録)

（10a）は中華料理（の持ち帰り料理）を食べ過ぎる、（10b）はケーキを食べ過ぎるという文であり、こちらは既述した文の再録である。いずれも特定の時間枠で生じた事象を述べる文であり、後者には *last week* という特定の時を表す副詞句が共起している。

ただ、こういった特定の時に生じる事象は *eat too much* の表現にはあらわれても *overeat* ではほとんどみられない。本研究の調査によると、*overeat* が *yesterday, last night, last week* などの時間を表す副詞句と共起する文は英語圏のコーパス・データには 1 例も生じていない。

そして、もう一つ、2 つの表現形式における違いは、*eat too much* が *eat* 同様、冠詞や修飾語句を伴わない不定の *food* を任意で明示できるのに対し、複合動詞 *overeat* は不定の *food* の表出をほとんど許さないという点である。

（11）a. What causes a person to **eat too much food**? ...(中略)... Maybe it's because as children we are taught not to waste food or maybe all of the above? (AU/ GloWbe)

b. We simply **overeat foods that have high concentrations of salt**. This can also contribute to high blood pressure. (CA/ GloWbe)

コーパス上には、*eat too much* において、（11a）のように何一つ修飾語句を伴わない *food* が目的語として生じる用例が 18 例みられるのに対し、

overeat ではそのように不定の *food* を目的語にとる用例は１例しかみられない[7]。*overeat* において目的語 *food* が表出する場合は、*that* 節で *food* を修飾している（11b）のように *food* を限定する要素[8] がほぼ義務的に生じている。

したがって *overeat* という動詞には、特定の時・場所で生じる事象をあらわすことはあまりなく、また不定の *food* の表出をほぼみとめない、という *eat too much* という代替表現にはみられない２つの性質があると考えられるのである。

この調査結果をうけ、本稿は２つの表現を同じ環境におき、どちらが実際の使用に適するか、インフォーマント・テストを行った。その結果、少なくとも前者、すなわち特定の時・場所で生じる事象をあらわすことができないという性質はデータ上の傾向に過ぎず、英語話者は *overeat* が特定の時を示す生起文脈で使用することができないとは認識していないことがわかった。

以下(12)は、テスト用に作成された例文である。すべての文が *last night* という副詞句を伴った過去形の文であり、（12b）および（12d）では疑問文の形をとっている。

（12）a. I **ate too much** last night.
b. Did you **eat too much** last night?
c. I **overate** last night.
d. Did you **overeat** last night?

テストの結果、３人中２人（米国２人、英国１人全て男性）が（12a, b）の *eat too much* を使った表現が（12c, d）という *overeat* を使ったその代替表現より高い頻度で使われると返答したものの、３人全員が４つの文は全て容認できる文であると回答した。

したがって、この *overeat* は特定の時・場所で生じる事象を表すことができないわけではなく、単に慣習的に *eat too much* の方が過去の状態を示すのに好まれているということになる。

一方で、後者の *overeat* の性質、つまり不定の *food* を目的語にほとんどとらないという言語的事実は、目的語の背景化をいくらか促す要因にはなるだろう。すなわち、不定の *food* が義務的に背景化されるのであれば、その分だけ目的語の生起率は下がるはずだからである。

では本節のおわりに、*eat too much* と *overeat* の２つの代替表現でどれだけの頻度でその目的語が生じるか、またいかなる共通点や相違点が存在するかなど、コーパス上のデータをまとめることで、総合的な考察を試みたい。下記表１を参照されたい。

表 1.　*overeat* とその代替表現 *eat too much* のコーパス・データ上の相違

	目的語生起率	不定の *food** の生起数	両表現に共通して生起する目的語	対応する代替表現にみられない特性
eat too much	37% (230 / 615)	18 例	*junk food, meat, chocolate, fat, sweet, protein* など	
overeat	7% (26/ 353)	1 例		特定の時間を表す副詞句との共起がみられない

＊修飾語句や冠詞を伴わない *food* が目的語として生起する例

上記表１が示すように、両表現に共通して生起する目的語には、*junk food* や *meat, chocolate* などがある。ちなみに、表中には、同一コーパス（GloWbe）で生起している厳密に同じ語の例のみを挙げているので、たとえば一方の表現で *sugary food* という目的語が生起し、もう片方の表現で *food with a lot of sugar* といったほぼ同じ意味の飲食物が目的語としてあらわれるといった事例も少なくない。いずれにせよ、両表現にみられる

目的語の性質は、「食べ過ぎ」行為をさらに悪化させる飲食物として、ほぼ一致している。

また両者の生産性については、上記表をみられるように、*eat too much* という表現の方が、1.74 倍程度その使用頻度が高い一方で、目的語の生起率は *overeat* の方が圧倒的に低くなっている。

この *overeat* の目的語の生起率の低さは、目的語にとれる語がいくらか制限される、また生起文脈が異なるといった、本稿がこれまで観察した周辺的な共時的事実だけではおそらく説明がつかない。

そのため、本稿は（不本意ながら）*overeat* という語が慣習的に自動詞として使われてきたこと、つまりもともとこの語が literature という使用域で自動詞としてのみ長く使われてきた通時的事実（Lieber　2004）も、この他動詞率の低さに関係しているのではないかと主張するものとしたい。

今回の調査では Web 上の英語という、ややインフォーマルな使用域で *overeat* の統語的ふるまいを分析したが、結局 OED を含めるほとんどの辞書でいまでも *overeat* の他動詞用法はみとめられていない（Cobuild 辞典は目的語が生起している例文を挙げている）。*overeat* の他動詞用法は通常容認できないものとする規範意識が英語話者のなかで働き、この動詞の目的語の生起が制限されているとしても別段不思議ではない。

5. まとめ

本稿では *overeat* とその代替表現である *eat too much* という 2 つの表現形式で共通して目的語として生じやすい事物には、文脈によって指定された飲食物と、「食べ過ぎ」行為をさらに悪化させかねない特定の食物（およびその成分）があることをコーパス上のデータから裏付けた。

この調査結果は、Lieber（2004）および Iwata（2008）の *overeat* の一般化をコーパス上のデータによって実証的に裏付けるものであるのと同時

に、2つの代替表現に強い近接性が存在する言語的証拠を示している。

一方で、*overeat* の目的語がここまで大きく制限される現象がなぜ生じるのかという問いに対しては、目的語にとれる語がいくらか制限される、また生起文脈が異なるといった、周辺的な事実観察だけでは説明がつかないため、この動詞が通時的に自動詞として使われるべきであるという規範意識が働き、その目的語生起が制限されている、という仮説を提示し、本稿を締めくくるものとする。

注

1　西脇が挙げている、3つの文脈で特定の *food* が省略されている事例を以下に記す。（ｉ）はレシピの文面、（ii）は乾燥剤のラベル、（iii）はフィクション（下記は魔法使いの女王が登場する非日常的な話）からの引用で、いずれもメロンや乾燥剤といった特定の目的語の省略がなされている。

（ｉ）To ripen **melons**, keep them at room temperature for a few days, when ripe store in the fridge and **eat** as soon as possible.（西脇 2011: 118/ BNC）

（ii）DO NOT **EAT**.（: 119/ 乾燥剤の表面印刷）

（iii）, turned out to contain **several pounds of the best Turkish delight**. [...] While he **was eating**, the Queen kept asking him questions.
（: 122/ C.S. Lewis, *Chronicles of Narnia*）

2　紙媒体の辞書では、*overeat* は（筆者の知る限り）自動詞用例しか記していないが、Cobuild 辞典の online 版では *overeat* の他動詞用例が記載されている。

3　Cobuild 辞典のデータベースであるコーパス、Wordbanks（1億語）で *overeat* の自他性を分析すると、27/27 例が自動詞になり、目的語が表出している例は1例もない（52 例の動名詞、および先行詞が意味上の主語になっている5例の不定詞用法でも目的語の表出はない）。

4　GloWbE のデータの大部分は公共機関や企業など公式の情報サイトからのデータで構成されるため、ニュースや新聞ほどではないにせよ、SNS やフィクションにみられる英語よりはフォーマルな文体である。そしてデータ抽出の際、完全に非文法とみなされる文は（総計 10 例前後で、ほとんど統計に影響は与えない数ではあるが）カウントしないこととした。

5　現在分詞や過去分詞の形でしか使われなくなり、動詞としての他動性を失う語彙化の問題は、それ自体が議論の対象となる英語学の大きな問題の一つであるが、動詞の自他性を中心に分析する本研究は、統計分析の際、基本的に動名詞・分詞、および不定詞の意味上の主語が先行詞である用例を分析の対象としない（ただし意味上

の主語が主節の主語と同じである関係節に続く分詞や分詞構文などはみとめる）。

6　下記のように、その事象が特定の時に生じたことを示す事例も 1 例あり、この一般化に対する例外的事例がないわけではない（ちなみに Did **NP** eat too much ? の疑問文は 4 例みられる）。

（ i ）THEN The alarm clock rings. Before I can open my eyes, a flood of thoughts starts to control my mind. What did I eat yesterday? **Did I overeat**? Lose control? How does my stomach feel? Is it empty?
(AU/ GloWbe)

7　以下の用例が唯一の例外であるが、この文では不定の *food* が *overeat* の目的語であるのと同時に *for* の前置詞の目的語になっている。

（ i ）The amount we waste in America is much more than in the European countries. I suppose you don't have to work as much to pay for **food you don't overeat** or waste. (US/ GloWbe)

8　*eat too much* では統語構造上、目的語に冠詞や所有格をつけることはできないが、*overeat* の目的語としての *food* には冠詞（ i 参照）や所有格（ ii 参照）などがほぼ義務的に付加される。また（ iii ）のように *junk food* といったファーストフードも（これが体に悪いかどうかは議論の分かれるところだが）2 つの代替表現の目的語として共通して表出する。

（ i ）Meaning that **the food** you **are overeating** would be better if someone else was eating it. (AU/ GloWbe)

（ ii ）In my experience, it is very difficult to **overeat these foods** (depending on your definition of overeating). (CA/ GloWbe)

（ iii ）Maybe she'll learn to appreciate food as nutrition and energy and we won't have to pay for her to **overeat junk food** to meet her twisted goal. (GB/ GloWbe)

参照文献

Bauer, Laurie, Rochelle Lieber, and Ingo Plag. 2013. *The Oxford Reference Guide to English Morphology*. Oxford: Oxford University Press.

Biber, Douglas, Johanson Stig, Susan Conrad and Geoffrey Leech. 1999. *The Longman Grammar of Spoken and Written English*. NewYork: Peason Education Limited.

Fillmore, Charles J. 1986. Pragmatically Controlled Zero Anaphora. *Proceedings of the Twelfth Annual Meeting of the Berkley Linguistics Society*: 95-107. Berkeley: Berkeley Linguistics Society.

Iwata, Seiji. 2008. *Locative alternation*. Philadelphia: John Benjamins Publication.

Levin, Beth. 1993. *English Verb Classes and Alternations*. Chicago: University of Chicago Press.

Lieber, Rochelle. 2004. *Morphology and lexical semantics*. Cambridge, U.K.: Cambridge University Press

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. 1985. *Comprehensive grammar of the English language*. London: Peason Education Limited.

Tayler, John R. 2003. *Linguistic Categorization*, 3rd edn. Oxford: Oxford University Press [First Edition 1989]

Tayler, John R. 2015. *Mental Corpus*. Oxford:Oxford University Press

安藤貞雄．2005.『現代英文法講義』．東京：開拓社.

西脇幸太．2011.「動詞 Eat の Missing　Object」.『英語語法文法研究』第 18 号：110-125．英語語法文法学会

Dictionaries & Corpora

British National Corpus. BYU. (https://www.english-corpora.org/bnc/)

Collins Cobuild dictionary online. Harper Collins UK (https://www.collinsdictionary.com/dictionary/english)

Core Corpus. BYU (https://www.english-corpora.org/core/)

Corpus of Global Web-Based English. BYU (https://www.english-corpora.org/glowbe/)

Longman Dictionary of Contemporary English online. Peason Education Limited. (https://www.ldoceonline.com/)

Now Corpus. BYU (https://corpus.byu.edu/now/)

WordBanks. 小学館コーパスネットワーク (http://scnweb.jkn21.com/WBO 2/)